

日本語の語彙力が日本人の感性を育む

— 日本人の心の機微から生まれた日本語を後世に伝えたい —

歴史ファンならずとも、感銘を受けて涙する参加者が続出する歴史講演会がある。講演者は、斬新な視点で歴史を紐解き、一瞬で参加者の心をつかむ白駒妃登美氏。日本の歴史や文化の魅力を国内外に発信する『株式会社ことほぎ』の代表取締役であり、“博多の歴史”の愛称で親しまれている。

使命感をもって日本の魅力を発信し続ける背景には、生死をさまよう大病を患ったことが大きな影響を与えている。病床の白駒氏を支え、生きる力をくれたのは、先人たちの生き様と珠玉の言葉。「生かされている今を大切にしよう。そして先人たちが大切に育んできた日本人の感性や志を表現していこう。それを誰かが受け取ってくれたら幸せ」という思いが、今に繋がっている。歴史に興味をもった経緯、魅力的な恩師、そして、日本語の力についてお話を伺った。

ことほぎ



株式会社ことほぎ
代表取締役 白駒妃登美氏



本物の教育は、頭だけではなく体にしみ込むもの

白駒氏を歴史好きへと導いたのは高校時代の古文の授業。文法だけを教える型通りの授業とは違い、和歌が生まれた時代背景や詠み人の人生など和歌の世界観を広げてくれる授業だった。歴史を知ればより深く和歌の世界に入り込める、と感じた白駒氏は歴史に興味を持ち始める。反面、歴史の授業は暗記科目だというイメージにとらわれていた。そんな白駒氏の思いを劇的に変えたのが日本史の教師だった。

「授業で、『奢侈^{しゃし}禁止令』（江戸時代に幾度も登場する贅沢の禁止令）を取り上げたことがありました。これを聞くと、“衣食住の細部にわたってさまざまな拘束を受ける中、窮屈に過ごす庶民”を連想しますが、先生の見解は正反対でした。“何度も禁止令が出たのは、庶民が御上の言いなりではなかったのではないか。案外、与えられた環境の中で生き生き

と暮らしていたのではないか”。まさに、目から鱗が落ちる思いでした。

歴史は暗記がゴールなのではなく、出来事を暗記するのは歴史を学ぶためのスタートにすぎないという考えになりました。ひとつの事象から、そこに生きた人々の姿や思いを想像することが歴史を学ぶことであり、先人たちの思いに寄り添うことで、歴史の醍醐味を味わえるようになったのです。今では『歴史』と言っていたかまでになりました」

日本語の語彙力＝日本人の感性

新たな視点を与え、視野を広げてくれた教師は、白駒氏にとってかけがえのない存在だった。視野の広い教師が教えれば、どんな教科書でも面白い授業になるという。さらに、生きる力を育むのも教育。だからこそ、絶望を希望に変えてくれるような、異なる視点を授けられる『人間力』のある教師が必要

なのだ」と語る。『人間力』の重要な要素のひとつが感性。

「航空会社に勤務していました頃、外国人に日本語の説明を求められることがありました。一番苦労したのが“一期一会”。“今この瞬間、もう二度と会えないという覚悟で相手に心を尽くす”という意味です。ところが、外国人は“今後も会う相手に尽くすことは理解できるが、二度と会えない相手にそこまでする必要はない”と言うのです。こうした理解の差を感じる場面に遭遇するたびに、言葉の背景を感じ取る日本人の感性の素晴らしさを再認識しました。

日本では、“こうしなさい”と真正面から説くよりも、“こんなことをしたら恥ずかしいですね”と、相手の心を傷つけることなく、やんわりと伝えることがあります。これも日本人ならではの言葉の心遣いです」

日本語には先人の智慧がたまっている

かつて、日本人は中国から伝えられた漢字から、ひらがな、カタカナ、国字を創りあげた。漢字だけでは日本人の細やかな感性を表現しきれなかったのである。ユニークなのは国字の創り方。たとえば、“働”は“人のために動く”、“躰”は身が美しいと書く。日本人は良い文化を取り入れ、日本流にアレンジして定着させることを得意とする民族。まるで、大豆に麴を加えて発酵させ味噌や醤油を作るようだと、白駒氏はこうした日本の文化を“発酵文化”と呼んでいる。文化を発酵させられる力こそ日本人の感性そ

のものだ。日本語にも深い思い入れを持つ白駒氏だが、そのきっかけをつくったのも、前述にある古文の教師だった。

「言葉は使い方を誤れば、人を傷つける場合もあり、人を勇気づけることもできます。人に与える印象も言葉ひとつで変わってきます。相手の心象を損なわないためにも、美しい言葉を意識して使う必要があるのです。また、日本には“おかげさま”、“粹”、“いただきます”など、日本にしかない言葉があります。西洋には神に感謝する言葉はあっても、“いただきます”のように、“食べものとなる生き物すべての命に感謝します”というような言葉はありません」

日本語検定に期待して

言葉に日本人の精神をのせて美しい日本語を使っていきたいと語る白駒さんだが、一方で、乱れた日本語や省略された日本語を使う人が多いことを懸念している。

「正しい日本語を習得し、語彙力を高めることのできる『日本語検定』にはとても期待しています。多くの日本人が『日本語検定』を受検して自らの日本語力を高める努力をして欲しいです。日本語力が身に付けば、日本人としての品格も上がり、『人間力』にも厚みがでてきます。私も、次世代にも受け継がれる正しい日本語を守っていきたいです」と力強く語ってくれた。



《 伊勢 和ごころ塾 特別合宿 》
～陽 素秋さんと行く伊勢神宮～

(株)ことほぎ
〒814-0001 福岡市早良区百道浜 1-3-70
ザ・レジデンシャルスイート・福岡 4307 号
TEL.092-407-2099 FAX.092-407-2079

詳細・お申し込みは下記 HP よりご確認ください。
URL <http://kotohogi2672.com>

